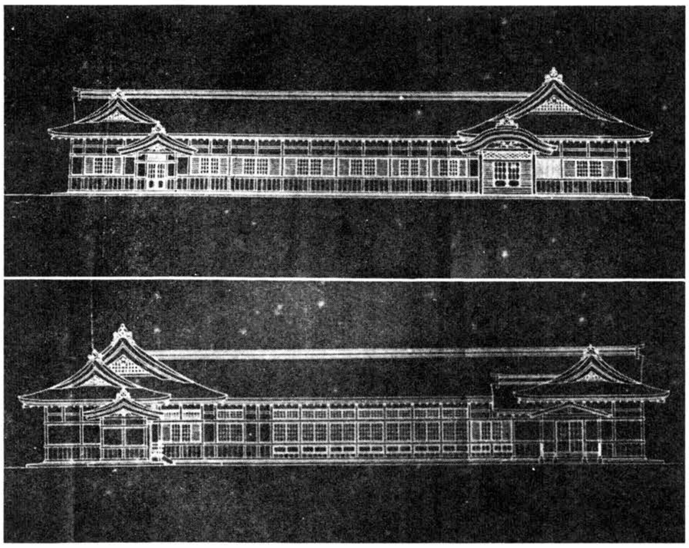
宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像会
福岡県宗像郡玄海町
電話 09406②1311代
定価　一年送料共　1000円

神具、装束
結婚式場用品
株式会社　井筒
九州店　福岡市博多区東公園二ー三二（〒八一二）
電話福岡（〇九二）六五一ー九四五六番
本社　京都市下京区油小路六条北入（〒六〇〇）
電話京都（〇七五）三四一ー三三二一（代）～四番
三五一ー一三三四・六〇六六番

靖国神社行幸殿
宗像大社境内に移築
── 宿衛舎（旧社務所）あとに建設 ──

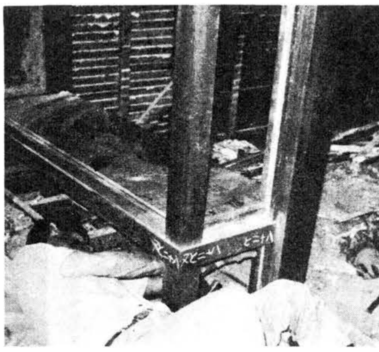


東京九段の靖国神社斎館が当大社境内に移築再建される。この建物は靖国神社の神門を入って左側に在り、一部は社務所として使用されていたが最近手狭となり、止む無くこれを撤去して跡地に二階建の新斎館を建設されることになった。しかし、この斎館は我が国木造建築技術の全盛期である昭和九年、社寺工務所によって建築された総桧造りの銅板葺建物（面積八二五平方米）で、戦災をまぬがれた貴重な建造物である。しかもこの建物の中には、天皇皇后両陛下の三十数回に及ぶ行幸啓を仰いだ行在所の一室が含まれ他に類を見ない由緒ある建物である。靖国神社では「昭和の代表的木造建物が消えるのはまことに忍びない」とその保存を強く望まれていたが、このたび、当大社で御譲与いただき境内に移築復元して永く保存継承することになった。再建の場所は神門内の現宿衛舎跡地。この宿衛舎は明治十五年、社務所として建設されたもので現在は専ら本殿警備の神職当直の建物として使用されているが、長い年月を経て老朽化し最近は雨漏りや白蟻の被害が著しくその改築の要に迫られていた。斎館の解体再建工事は先年第二宮第三宮造営工事を担当した地元宗像町の（株）弘江組に決定。同社では去る八月から棟梁一行が靖国神社に赴き、在京の文化財建造物の専門建築業者と協力して解体工事に従事していたが、随処に「隠しクギ」の技法をふんだんに駆使した精巧な木組みに苦心しながら十二月までに漸く全解体工事を終えた。解体後の用材は丁寧に養生を施し、年明けを待って十一トントラック三十台で宗像に搬入される。工事完成は来年九月。総工費約二億九千万円。

完成後は神道の研修道場として、また毎秋行われている表千家家元奉仕の献茶祭副席、その他幅広く活用される予定である。

国難に殉じて散華された護国の英霊を祀られる靖国神社の斎館、わけても天皇皇后両陛下の行在所を当大社境内に移設復元することは、国家鎮護、皇室守護の顕現である靖国精神を顕彰することであり、御神勅に基づく、宗像三柱大神の鎮祭の本義に照らして極めて意義深く、その完成が待望されている。

去る十一月八日には神宝館が完成し、十万点に及ぶ海の正倉院沖津宮祭祀神宝をはじめ社伝の貴重な文化財が一堂に収蔵されることになったが、これに引続き、昭和の代表的木造建造物が当大社境内に再建され、重要文化財指定の本殿拝殿や、第二宮第三宮社殿として造営された伊勢神宮別宮古殿と共に後世に保存継承されていくことは、文化財保護の立場からも重要な使命を果たすことであり、当大社造営史上に新たな一頁を加えることとなった。



（解体中の行幸殿）

論説

九州に於ける宗教性悲劇の特色

宗教の本質は、世界いずれの民族社会を問わず、生存の不安定や求幸招福の願望が神仏への信仰を詮索させるに至った点にある。これは地域や民族の区別なく、本質は共通し宗教学上にも異論のない結論と言える。

その願望がまた世界的歴史的展望に於いて、いかに多くの犠牲悲劇を遺したか。現代の宗教史研究の主眼が、概ねその解明にあると言っても過言ではなかろう。

現代の世界の不安争斗を通覧しても、経済や政情よりも大きな比重を占めているのが宗教で、それは信仰的特色の相違による場合は少ない。勿論、それは表面に現れたニュース的現象で、信仰的特色は根深く潜在しているかも知れない。少しくわが国特に九州に於ける宗教性の悲劇に就いて、検討詮索してみたい。

年代的に神話伝説時代と区別される期間には触れない。奈良京都の地方には多くの悲劇が史上に残されているが、九州では先ず切支丹の犠牲が挙げられる。これは年代的にも遠くはなく、資料も得易い。

世界三大宗教の一つとするイスラム教は、極東方面に縁故の薄い宗教であったが、最近の経済関係特にエネルギーの問題から、石油産出国の殆どがイスラム教を奉じているので、日本にもイスラムとの関係が大きく浮上しかけてきた。アラブも同様だが、イスラムの国々では、宗教を無視しては生活が考えられない現実である。

それと同様の歴史が、島原を始め天草平戸、九州に近い山陰の津和野など、史家が呼ぶ「隠れキリシタン」の遺跡に残っている。島原の乱に若き盟主四郎時貞を擁して起った戦力は頑強で、武威を誇る周辺の大名等は甚しく面目を失墜したとされる。関ケ原や大阪陣の残党またその末裔が、意地か捨鉢の奮戦を見せたからとされているが、それだけではない。

意外なところで、その島原の乱に見せた戦力が尾を引き、切支丹残党の捜索誅滅の矛は厳しく加えられた。聖母マリヤの像は、菩薩や観音像に似せた工作が行われた。ひそかに偽造観音を拝礼する作法が、役人の目をかすめて、隠れキリシタンの伝統を保ったのであって、地下組成は却って強烈であったと想察される。

幕末から明治にかけて興隆した所謂教祖神道、即ち神道十三派は、隠れキリシタンの遺跡との接触結合も少くはない。特に宗教学的考察に於いて、多神教的崇拝慣習を本旨とする一般神社の神道思想とは、甚しく駈け離れた一神教的崇拝形体に徹底した点が、仏教の慈悲心の養成が隣人の不幸を救済するものでなくて、自己啓蒙の活路自覚を第一義と観るにあった。

教祖が迫害や処罰を受けた場合を、キリスト受難の事績になぞらえ、降誕を聖母の清潔性に因ると説く教派もあって、天主教末流の思考が生きていた傾向は見逃せない。中でも、受難的成立として異色の禊教は、教祖が幕府の処罰を受けたことを、キリスト受難の事績に結びつけたと見られる点は注目に価する。

長崎や平戸等の隠れキリシタンは印刷技術を持っていた。それを巧みに活用した神道教派もあったことは、両者の暗黙の結合を解明させる。多数の宗教学者関係者がその事績を解明している。天主教の末流生命たる受難切支丹の末路が、教祖に強い示唆を与えたのである。

信仰の自由を得て、天草中心の天主教徒末裔も性格を一変した。かっての弾圧の中に隠れキリシタンの信仰命脈を堅持した遺跡は、その子孫の生活の具に供されていると聞く。今日の観光ブームに天草の島々が便乗しないわけはない。五橋が自動車の通行を容易にし、時間のかかる便船が減少して、各地ともパールラインの看板に派手な宣伝が見られる。

隠れキリシタンは観光客拝観資料を十分に残さなかったので、その末裔達は少しでも信仰の匂いを持つ品々を列べ立てているようである。勿論、専門家の指導は当然遺品の陳列にも見られるが、パールラインの営業意識が強くて、処刑された先祖の幻想的ベールを剥ぐと評する向きもある。

教祖神道の性格と、その発展に影響を与えた天主教関係の遺跡とを検討したのであるが、宗教的匂いのある施設や美術品等は、欧州旅行でも見聞したと同様に、観光資源として取扱い、営利打算の嫌味がある。信仰と観光との関連は今後いよいよ深くなろう。

阿蒙少言

「花よる明くるみ吉野の、春の曙見渡せば、もろこし人もこま人も、大和ごころになりぬべし」と筑前今様に歌っているが、満開の桜花を唐人や高麗人が眺めたら直ちに大和心になるとは、大胆な表現である。今時の中国人韓国人が、そうなるだろうか◉山野に爛漫たる桜花は、たしかに素晴らしい風景にはちがいないが、外国人に日本人と同じ精神が宿るとは考え難い。殊に往年の大和魂の解釈では、尚更に難点が残る◉遅れ先立つことなく一時に悉く開いて研を競う風景は、広漠たる原野と悠々たる濁流の大陸では見かけられまいが、反面にせせこましさの島国根性も存在する。大和心と大和魂とは語呂の響きに、烈しさと穏やかさが別個のもののよう感じられるが、異質でない◉一時に開く友和とその集団美を強調するはよい。然し、戦時中屡々この今様が精神訓話に引用されて、共に戦って共に死ぬ愛国心にされたのであろうは、山の神も違うと宣うであろう。同時に散るは、同時に潔く果てると解釈しないがよい◉友和と集団美、それが花の心で、心に咲く花もそれでなくてはならぬ。死ね死ね、国の為なら何でも潔く死ねと訓えては悪魔的で、人間性の自然を無視している。生きろ生きろ、決して軽々しく死ぬなと叫びたい◉少言子は戦場で一部隊の指揮者であったことがある。上級の部隊長の精神訓話の後、自隊の宿衛地に帰ると隊員に解散前一言する癖があった「死んではならぬ、手柄など考えるな、勲章よりも郷里の妻子には無事な姿が何よりの出征みやげだ」と。まことに勇ましくない小指揮者であった◉露店の物売りに仲間が客に化けてのぞく、良い品だ安い品だと買い気をあふる。露店のインチキ客を山の神は産まぬ。どこから出たのか、名前は「さくら」。

（白雲）

第三回　宗像大社歌会詠草

毎月一日〆切　詠草到着順

田熊　今村重刀
秋晴にコスモスの花咲きさかり花なみ生駒高原をおほふ

古賀　吉武邦夫
心臓の発作の止めば孫のごと若き看護婦に淡き恋する

津屋崎　内田久美
苅りあえず残りし粟立草の花ひらきて今は美しき淡景となりぬ

相模原市　早川ふさ
夕焉せし遠空に浮びたる富士の姿を渡ら瀬に見る

福間　二宮末子
こしかたの跡をたずねてみちのくの山よりいずる秋の月影

宮田　片山一
ゆくりなく珠数を握れば残事をまさくる如き感傷の湧く

松戸　吉田信夫
市役所に「ながいき課」てふ課ありて老人医療の証明を受く

吉留　高山信子
ひとりのみ泣かせはせぬと病みてこばめる女に師は口づけぬ

福間　広渡一寿軒
鎮国寺の庭紅葉して眼を向けば辺津宮の社厳かに見ゆ

武丸　原田まつ代
韮の花今年も咲きて亡き妹の植えたる疎開時思ひ偲し

箱崎　吉村三郎
浜霜の海に向いし老人は気合をかけて木剣を振う

田久　立花勇雄
あの山も団地と成るらし造成の野焼きの煙空にのぼれり

日の里　清原絹代
大理石の図書館に並ぶ噴水の今のぼりたり七〇メートル

原町　八波五月
作道の草刈る農婦花芽立つ曼珠沙華の株残して行きぬ

香椎　桜井ツ子
聞きもらす程にかそけくこの夕べ蛐が啼く雨の晴れ間を

池田　永富臻
連れだちて札所をめぐるに足おそき妻なり藤の花陰に待つ

南郷　片山雀林
久方の雨にうるほう野菜畑色生きたちて食味をさそう

東郷　藤崎辰子
ひた走り流れきたれる紙箱の青きが渦に一巡りせり

曲　天野トモヱ
庭に咲くさびしき色の吾亦紅この花知らぬ友に見せたき

田久　小方実
瓦が葺かれ壁ぬり終れば子の家に大工様らの車群がる

津丸　藤田肇
関取りがチンドン屋となり映りをり資本は営利に手段選ばず

福間　山本夏枝
この道を行けば君の家中庭の高き樅の木見えて来たりぬ

武丸　原田リノ
きのふまで生きのよかりし畢茅の葉は一夜にて霜になへたり

武丸　立石ろせ乃
夏を来て孫らの釣り来し鮒の子が鯉によりそひ泉水を游ぐ

徳重　石松や寿子
農作業かへりみずしてアパートに安らぐ今日の菊日和かな

八幡西　磯谷緑雨
遺体まだ見当らぬ僞焼跡にあした冷たく涙雨ふる

土穴　塚本幾子
六段の調べなりしか夫が吹く尺八（たけ）の音色の今日は冴えおり

田熊　力丸一郎
ひと山を石垣棚田にのこしたる古人を偲ぶ秋の八女路に

東郷　田中春子
ふとすぎる床の置物また一つ夫のみやげの荷がほどかるる

吉留　白木うめの
田作りも牛飼ひも子にまかせ来て吾が領域のせまくなりたり

津屋崎　谷口礼子
この胸に眠りて永久に安かれと祈りし甲斐無く離れ行く義姉

田島　吉武武雄
場内は清楚幽雅の菊香おり王朝絵巻もかくばやと佇む

深田　中野節子
人の賜びし大島の椎の実ことごとくはじけてをりて余さず食べぬ

名古屋　野崎儁三
瀬の音も恋ふかにひびく師の歌碑に紅葉照りたふ飯盛の山

田熊　吉田直志
異常なる冷夏に稲は三割減とひそけく話す若きらの声

田熊　鷲津かつ代
垣を越す庭木の枝は剪りあひて隣の人とながく住み来ぬ

大祓式並除夜祭

――一年の罪穢を祓う――

宗像大社の年中祭事の掉尾を飾る大祓神事、並に、除夜祭は、恒例により、来る十二月三十一日午后五時より斎行される。

大祓神事は、当大社の数多い神事の中でも、最も古い歴史と伝統を有するもので、古来、我が国では、一年を二季に分け季夏（六月）、季冬（十二月）、の各々の晦日に、国家の公的な行事としての大祓式が行われて来た。六月の大祓は一般に夏越祓と呼び、悪疫病災の退散を主とする祓に対して、十二月の大祓は、一年最後の区切として、人民の罪穢を除払する行事として行われて来た。

一年間の罪穢を祓い除けて、清々しい心身に立ちかえって新年を迎え、更に、平穏幸福とより飛躍的な生活を希求する日本国民の切実なる望みが、この大祓式の神事として千年以上も今日まで受継がれたのである。

当大社では、十二月三十一日、定刻、葦津宮司以下、神職・巫子・職員・それに氏子崇敬者一同、冬の暮色に一段と荘厳味を増す神門前に列立、先ず宮司が大祓式を行う旨宣下、大祓詞が奉読され引継き、前に配布された切麻で各自、自分自身の身体に振りかけて祓を行い、次に、被物の白衣に息を吹きかけて裂帛の祓を行う事になっている。

又、当日、全国の崇敬者より奇せられた紅白の人形五万体、郡内氏子より寄せられた一万五千体の人形も斎場に供えられ、厳かな祓が修せられ、古儀に則り、釣川河口より遠く玄界洋上に流禊れる。

引続き、本殿に参進、除夜祭が斎行される。御饌・神酒・餅等の盛沢山の神饌がお供えされ、昭和五十五年元旦より昭和五十五年の今日の大晦日まで、一日一夜も落つる事なく、溜る事なく大神等の御加護を戴き奉り、平穏無事の生活が送れた感謝の祈りが捧げられる。

かくして、宗像大社の氏子、崇敬者各位が、大神等の御神威の下、新しい年を迎えて清々しい心身に立ちかえり、交通安全はもとより、益々繁栄されるように祈願する今年最後の神事が執行されるのである。

大祓式並除夜祭御案内

拝啓　時下益々御清栄のこととお慶び申し上げます。

扨て、当社の年越の人形大祓神事を十二月三十一日午後五時より執り行います。このお祭りは、皆様の心身の罪（つみ）・穢（けがれ）を人形に託して祓い除き、新たな清々しい気持で日々の生活を安らかにお過ごしになられますよう願いをこめたお祭りです。

お送り致しました紅白の人形にそれぞれ息を吹きかけ、初穂料をそえられ、十二月三十一日迄に到着するよう御送付下さい。

尚、御都合のつきます方はお祭りに御参加下さい。

宗像大社
宮司　葦津嘉之

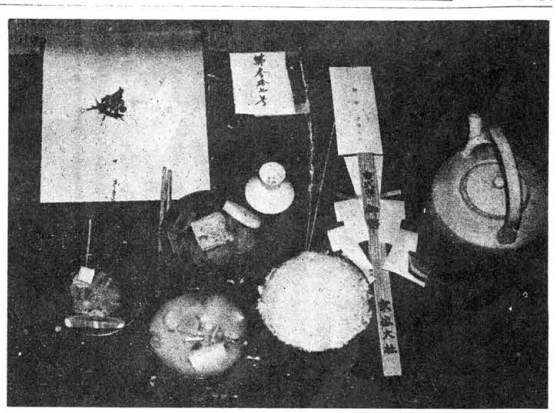
崇敬者各位

古式祭

――神前に祝う五穀豊穣――

師走の十五日、恒例の古式祭が斎行された。

古式祭は、今年最後の収穫感謝祭であります。氏神様に対して一年中の勤労を感謝して今年の収穫物を捧げ、お宮の火で焚いた一つ釜の食物を氏子の方々が神様と一緒にいただく行事であります。この行事は宮中に於ては、神嘗殿に於て新嘗祭を行っておられるのと同じ意義のものであります。宮中の新嘗祭が深夜四時間もお坐りになられたままで執り行わせられる最も厳粛かつ、重大な祭儀であることを思えば古式祭の大事なことがお解りと存じます。この意味でなるべく沢山の方々がお宮の座に参加されることを希望致します。又、お座は招福の集いとも言われ神人和楽することができる年に一度の集会であることに古式祭の意味があります。



約八百年の伝統を持つ宗像大社の古式祭には普通のお供え物のほかに、九年母、菱餅で作ったお菓子、更に江口の浦より上る海草の味噌あえ「ゲバサモ」という特別の神饌を供えて、十二月十五日未明に「お座」を催すのが古来からのしきたりであります。

今年も一番座五十名が、午前六時祭典のあと、清明殿に於いて開始され、座券番号に合せ着座、神事のあと、今年の新穀をいただいた。

二番座、三番座と続き、東の空が明るくなるには、十時より斎行される鎮火祭列の消防団員の人々が着座して、今年の古式祭お座を終った。

また午前十時より斎行された鎮火祭は、年末年始の火鎮めを祈り郡内はもちろん、天が下の災いなき事を祈り、新年を迎える心がまえを、一同謹って、古式の鎮火神事を見まもって、祭典を終了した。

ちなみに、今年十一月末までの宗像郡内、火災件数四〇件、損害費、五千五拾六万円也と消防本部は発表している。又救急車出動件数は、一千八拾一件にもなる。

難しい国歌問答

明治維新以後、外国に故ってわが国でも国歌が生れたが、現在一部の反発勢力は法的根拠がないと理由づけて、会合や式日の行事に歌わないよう説いている。勿論、国民の常識的納得から歌われてきたもので、難しい法的制定論など国民一般は問題にしていない。

歌詞は、読人知らずとして古今集に載せられている「君が代は千代に八千代にさざれ石のいわおとなりて苔の蒸すまで」を採ったのである。ある推察では、読人は当家より個人が優先して、カネと少年よ、個人的距離が大神ノが日本列島を腐敗の巣にしてはいないか。私腹を肥やす役人政治屋の我欲盲進は毎日のようにニュースの材料となっている。何をしても恥じない傾向は、少しの懲罰や訓戒くらいでは改まらない。力の限りを尽して国民の安寧利福のために働いてほしいと願ったら、陸でひそかに舌を出して笑う官僚も多かろう。

同じ戦後でも既に三十年以上を経過、二ケ月にも昼る少量の食糧の遅欠配に辛酸をなめた青少年と、不正を憎み勇気と自分の行動に誇を持つ人間になれと教えられる最近の青少年とは、甚だしい人間的距離がある。終戦直後の辛酸組が優勢な職場や組織では、愛国心の題目すら耳を通らない。その点日本は平和な国土だ、幸いにもその国土に生を享けたのだから、みな心から喜ばなければならない、そこには異質の人間感情があり、愛国心があきらめの心境とは根本的に違っても、ごく少数の理屈派が圧倒的に多くの声なき声を圧する事は民主主義の原則ではない。

同じ戦後派でも、これほど違っては、異質も異質、まことに問題になろう。昭和三十年を過ぎて国内も安定した頃、平和な労働気料理屋は、関係者のひそかな情報の中に伸び伸びと成長した連中が高校卒業期になった。

某誌の記者が、卒業式に集った生徒にマイクを向けて、君が代斉唱について意見を求めた「君が代は、国民の公的な行事に際しては、国家の公的な行事としての日に、国家の公的な行事としての大祓式が行われて来た。六月の大祓は一般に夏越祓と呼び、悪疫病災の退散を主とする祓に対して、十二月の大祓は、一年最後の区切として、人民の罪穢を除払する行事として行われて来た。

一年間の罪穢を祓い除けて、清々しい心身に立ちかえって新年を迎え、更に、平穏幸福とより飛躍的な生活を希求する日本国民の切実なる望みが、この大祓式の神事として千年以上も今日まで受継がれたのである。

当大社では、十二月三十一日、定刻、葦津宮司以下、神職・巫子・職員・それに氏子崇敬者一同、冬の暮色に一段と荘厳味を増す神門前に列立、先ず宮司が大祓式を行う旨宣下、大祓詞が奉読され引継き、前に配布された切麻で各自、自分自身の身体に振りかけて祓を行い、次に、被物の白衣に息を吹きかけて裂帛の祓を行う事になっている。

又、当日、全国の崇敬者より奇せられた紅白の人形五万体、郡内氏子より寄せられた一万五千体の人形も斎場に供えられ、厳かな祓が修せられ、古儀に則り、釣川河口より遠く玄界洋上に流禊れる。

引続き、本殿に参進、除夜祭が斎行される。御饌・神酒・餅等の盛沢山の神饌がお供えされ、昭和五十五年元旦より昭和五十五年の今日の大晦日まで、一日一夜も落つる事なく、溜る事なく大神等の御加護を戴き奉り、平穏無事の生活が送れた感謝の祈りが捧げられる。

かくして、宗像大社の氏子、崇敬者各位が、大神等の御神威の下、新しい年を迎えて清々しい心身に立ちかえり、交通安全はもとより、益々繁栄されるように祈願する今年最後の神事が執行されるのである。

大祓式並除夜祭御案内

拝啓　時下益々御清栄のこととお慶び申し上げます。

扨て、当社の年越の人形大祓神事を十二月三十一日午後五時より執り行います。このお祭りは、皆様の心身の罪（つみ）・穢（けがれ）を人形に託して祓い除き、新たな清々しい気持で日々の生活を安らかにお過ごしになられますよう願いをこめたお祭りです。

お送り致しました紅白の人形にそれぞれ息を吹きかけ、初穂料をそえられ、十二月三十一日迄に到着するよう御送付下さい。

尚、御都合のつきます方はお祭りに御参加下さい。

宗像大社
宮司　葦津嘉之

崇敬者各位

残筆しがらみ草紙　(47)

玄陽隠士

ロッキード事件が喧しくなった昭和五十一年四、五月ごろ都内のホテルや小料理屋は、関係者のひそかな情報交換に足繁く出入が続いた。その頃の流行語に「潔白声明」があった。真に潔白な政治家役人が、もこの流行語に乗っていない。人生は一度きりである。悔いも迷惑もない。

和なよい国土だ、幸いにもその国土に生を享けたのだから、みな心から喜ばなければならない、そこには異質の人間感情があり、愛国心があきらめの心境とは根本的に違っても、ごく少数の理屈派が圧倒的に多くの声なき声を圧する事は民主主義の原則ではない。別れゆく学友と声を揃えて「歌いたい」歌ってもらいたい」と、君が代賛成派が圧倒的に多数を占めた。

そのため五十二年度から、幹部昇進の道を広げる万策を尽として、研修制度を改革してゆく方針を公示した。

教育の充実、初中級職採用試験合格者にも幹部昇進の道を大幅に拡充、守秘義務の規定厳守などを改革方針として発表したが、倫理性欠如のご都合主義の保守政治家による懇談会の成果に、期待が持てそうには思われなかった。

憲法論まで登場して「君が代斉唱反対」の立看板の現れたある年の正月、老神職は民主的名案のつもりか「君が代は」の第一節を「君と民は」に変更の意見を、年賀状の追記に印刷したのを送って来た。君と民は千代に八千代にさざれ石の巌となりて苔の蒸すまで

歌っても自由、歌わぬも自由、どちらにせよ悪い理由などあろう筈がない。誰

国歌を論議することは、つつしまねばならない。読み人知らずながら古今集に載せられた意義と詠者の精神を思う時、安易な批判もよろしくない。時代の変化だから仕方がないと、あきらめの心境におのれを埋没してもよいものか。

ーと、名案のつもりだったのだろうが許されない理由がある。

君と民と列べても、一見何の不都合もないように見えるが、この二元的表現はやがて多数の民の優勢に、君が消えてゆく懸念があるこ二元的は絶対不可と私見をつけた年賀状を送ったところ、激怒を買った。先方にくらべると若い当方、後輩の分在で出過ぎると憤慨されて苦笑した。

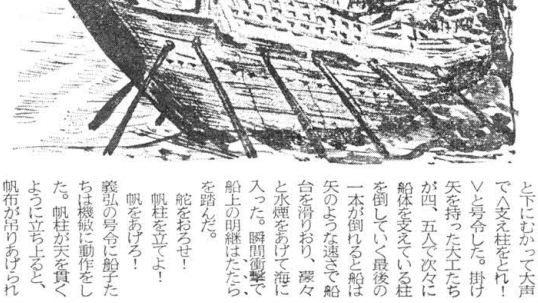
国歌を論議することは、つつしまねばならない。読み人知らずながら古今集に載せられた意義と詠者の精神を思う時、安易な批判もよろしくない。時代の変化だから仕方がないと、あきらめの心境におのれを埋没してもよいものか。

図南　(その三)

こうのみなと　神湊

(99)

楠早鳥作
福田長庵画



入京の情勢が判明するまでは、帰るに帰りぬくの明継は病床のままぼるを想いつつやいた。幕府と大内弘茂の動勢を、山口にいる照晃に伝えてやりたい、場合によってはるい共犬氏俊のもとに送りとどけたい、それにしても、より詳細な情報をと朝夕と日を送る明継を義弘が鬼眼の女人と共に見せたいものがあると招いた。

「また一艘大船を造りおえたので船卸しに案内しようと思ってな」と義弘が誘った。行けば必ず図南の話になると思ったが、興味を押さえきれずに義弘の後に従い、馬にまたがり背後に女人を乗せ手を自分の胸にまわさせた。

駒を進めると舟の手入れをしている小者たちが、ほう！と云う眼差しで見上げた。いささか面映ゆく、誇らし気な自分の姿に苦笑しながら義弘の後姿を眺めて進んだ。

峠を越えて泊の背部の松林に駒を乗り入れると「何者か！」と誰何の声がかかった。村上の警備の士である。「馬はこれへ」と手綱をとって広場へ引き入れ、一同に馬からおりるよう伝えた。「ここから先は如何なる者も徒歩で行くように命じてあるのでな」無雑作に云って坂を下る義弘をみて明継は今更ながら村上の軍律の厳しさに打たれた。慣れない道をおぼつかなげな足取りで下る女人に手を添えてやり砂浜に立つと、でき完った大船が目の前にあった。「かって乗った船より一回りも大きい」「一体どれ位ある」明継の問いに「千石と云いたいところだが、実際は七百石くらいだ、これ以上の船は今の技術は難しい、また仮に造ったとしても操船に自信がない」と義弘が応えた。

立ち話をしているうちに潮が高ちてきた。「船出が船霊ごめをいたしますので御乗船を」近習の言葉にうながされて船の方に歩を運めかった義弘が、ふと立止り船卸しに女人は纔物じゃ、某方はここから眺めるがよい」と振眼のまま「女人に声をかけた。海の色ほど碧い眼をいっぱいに開いて、いぶかしげな顔をする女人に明継は朗語で言い聞かせた。

縄梯子をつたって船に上ると帆柱を立てる間の前に米・酒・魚を供えて船匠がうずくまり祈りの声を挙げている。「何を祈っているのだ」明継の問いに「こればかりは儂にも解らん、何でも船匠が代々伝えている仕来たりらしい」義弘の応えを合図にしたかのように船匠が木槌を振りあげ高らかな声で言い聞かせた。

「大船の目の前にある一本が倒れると船は矢のような速さで船台を滑りおり、瞬々と水煙をあげて海に入った。瞬間衝撃で船上の明継はたらを踏んだ。

「舵をおろせ！」

「帆柱を立よ！」

「帆をあげろ！」

義弘の号令に船方たちは機敏に動作をした。帆柱が天を貫くように立ち上ると、帆布が吊りあげられ、それが見るまに大きく風を孕み大空にはためいた。船はぐうんと加速して船首を海へ突込むようにして波を蹴立て進んだ。みるみる島が遠去かって行く。船先は陸岸を向いている。何時回頭するかと思うちに安芸の瀬岸が見えてきた。

「大船を入目にたて大丈夫かな」心配気に問う明継に八方から沿岸を一わたり走って帰る。これ程の船を見れば、明日にでも幕府の奴等の耳に入ろう。とすれば亦何かの動きが起ころう」と義弘に義弘は叫んだ。

★　★

頬をかく法の船かな

と唱えて儀式は完った。

船霊とは唐船に祀る媽祖のことかと明継は考えた。媽祖は媽姐と

B&G 海洋スポーツセンター落成

去る十一月二十一日（金）、玄海海洋センターの開所式が、中九州海運局長、B&G財団森田副会長ら約二百名が出席して行なわれた。このセンターは、ブルーシーアンドグリーンランド財団（会長・笹川良一氏）により、玄海町江口に建てられたもので、体育館として使用される。

笹川会長は、日頃から日本の青少年の健全な育成に心をくだき、未来を築く青少年は心身ともに健康で、礼と節をわきまえ、人のために尽くす人間でなくてはならない、また世界は同じ一家であり、人類はすべて兄弟姉妹であるという広い心を持った国際人であってほしいと説かれていた。

この会長の願いを基に、日本の実情に合った心身の健全育成のための計画が「B&Gプラン」としてまとめられ、スタートすることになったものである。

このプランを実現させる機関として、昭和四十八年三月、財団法人ブルーシー・アンド・グリーンランド財団（略称B&G財団）の設立が運輸省によって正式に許可された。そして目的として、

「この法人は、わが国の四周をめぐらす青い海と、これに続く緑の国土を場とし、主として青少年を対象に、海洋性レクリエーション事業を軸とした実践活動を通して、海事思想の普及をはかるとともに、その人間形成と体力向上をはかり、もって海洋国日本の発展に資することを目的とする。」としています。

B&G財団は、その事業として

①海や河川、湖などの水辺に艇庫を建設、またプール、体育館の建設。

③指導者の養成。

③誰でも入会できるB&Gクラブの組織づくり。

④研修体験航海、若人の船、少年の船、児童の船などによる海洋性スポーツ・レクリエーションの提供。

という事業を行なっています。

玄海海洋センターも、このような事業の一環として建設され、大いに活用されることが望まれています。

なお休館日は、年末年始及び毎週月曜日となっており、開閉館時刻は午前九時から午後九時三十分となっています。

体育館で出来る主な種目は、バスケットボール、バレーボール、バドミントン、卓球、剣道等で、そのほかレクリエーション等に利用していただきたいとのことです。

尚、十一月三十日午前九時より当スポーツセンターに於て、玄海町内、少年剣道三教室による落成祝賀大会が行なわれた。

玄海町には三つの剣道教室がある。玄海少年剣道教室、岬少年剣道クラブ、池野少年剣道教室の三教室で、各教室一週間に二回の練習を行い、業と礼を修めている。

又当日の呼びものは、後援会による各教室より二チーム出場の団体戦であった。日頃子供達に応援を送り、試合心得を説く育成会の父兄代表も、防具に身をかため竹刀を手にすると、日頃の指導心得の様に鋭い剣さばきもままならず四苦八苦であった。

日頃ハッパをかけられる少年達はこの日ばかりは後援者になってヤンヤの声援を送った。

大会成績は次の通り。

【団体戦の部】

優勝 玄洲少年Bチーム

二位 玄海少年Aチーム

【個人戦の部】（一位のみ）

二年 川島 克三（玄少）

三年 古藤 尊樹（玄少）

四年 中山 正裕（玄少）

五年 永島 久成（玄少）

六年 山路 清隆（岬）

中一 田中賢一郎（玄中）

中二 浜田 昌則（玄中）

「七五三」・「菊」写真コンテスト

菊花薫る十一月、七五三詣りを記念して企画いたしました「宗像大社七五三写真コンテスト」入賞者が多数の御応募の中から厳選の結果左記の方々に決定いたしましたのでお知らせいたします。

（敬称略）

―◇―◇―

七五三の部

ファミリー大賞

森 広次（うれしい七五三の日）

美しいで賞

岡本美智子（記念撮影）

可愛いで賞

竹村良三郎（楽しい七五三）

西 泰昭（緊張）

よく写ったで賞

渋田光湖（神木の色づく頃）

岡本美智子（氏神の座にて）

〃（御祓い前に）

渋田貴子（七五三詣りの日に）

西 泰昭（アアー疲れた!）

桑野敏夫（疲の中は何かな!）

磯部真治（七五三）

菊の部

推薦

花田哲也（秋の蝶）

特選

竹村良三郎（菊花祭見物の老夫婦）

準特選

西 泰昭（菊人形）

岡本美智子（菊花薫る日）

入選

西 泰昭（黄色い花笠）

長瀬鶴雄（入賞に輝く菊花）

渋田光湖（出品にそなえて）

藤村正勝（菊を見物する一家）

花田哲也（華を競う）

井上憲治（孫にひかれて）

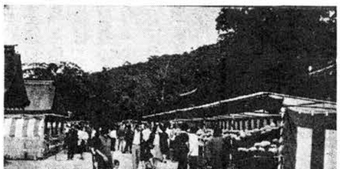
藤村正勝（懸崖広場）

渋田光湖（神苑をかざる人々）

岡本美智子（菊人形）

以上

なお入賞作品は宗像大社祈願殿ロビー二階に展示いたしておりますので御覧下さい。



（菊花展で賑う境内）

信仰

鎮守神（領主神）

一定の地域を鎮安守護する神で、一国鎮守・王城鎮守・城内鎮守あるいは寺院鎮守などがあった。しかし近世以降、鎮守といえば村落鎮守が普通で、産土神（うぶすなのかみ）や氏神と混同されやすく、今日ではほとんど区別されないようになった。

本来の意味では一国鎮守はたいていその国の一ノ宮をあてたようで、王城鎮守には二十一神の例もあるが、京都御所には宗像神社が祀られ皇室守護神として尊崇があつかった。また東大寺に対する八幡神は寺院鎮守として最も古い例の一つであり、城内鎮守としては江戸城における山王社が一例である。

このように鎮守神は特に選ばれたものが多いので、神格が高く、したがって勧請（かんじょう）される場合も多かった。そこで在来土着の神霊（地主神など）と衝突もしたが、たいてい妥協し吸収してしまった。「鎮主神」と書かれるのはこのためとの説もある。

鎮守神には神威赫々たるものが多く、特別の尊崇を集めたので、敬意を強めるつもりで「鎮守」と唱えることが流行した。村落鎮守の多くは古来の地主神であり、産土神であったにもかかわらず鎮守神と称せられた。

これより先、社会組織の単位が血縁的生活協団体から地縁的生活協同体に移行すると共に、血縁関係を枢軸とする氏神信仰が、地縁関係を枢軸とする鎮守神信仰・産土神信仰におき替えられてきた。

このようにして今日では、氏神・鎮守・産土は居住地の守護神と考えられ、区別が意識されないようになっているのである。なお前述のように鎮守神は神格の高いことが意識されていたので、純粋な信仰関係からも、祭神の交替ということがあった。

また祭神には例えば藤原氏系統に属する土地には春日さま、平氏系統に属する土地には宮島さま、源氏系統に属する土地には八幡さまの祭られるような場合が多かったが、時代によって土地の所属関係が移動し、政治・経済関係による祭神の交替もまぬがれなかった。

氏神は同じ血統のもの、鎮守神・産土神は同じ地域のものによって信仰されたことが、最も根本的な相違点であったが、鎮守神が特に選ばれた場合が多いが、氏神や産土神は氏人や産子（うぶこ）が勝手に選ぶことの許されるものではなかった。また産土神は人の生れた土地によって定められた。

「うぶすな」には「本居」「生土」などの文字があてられ、特定の土地と、そこの住民とを支配し守護するものと信じられていた。交通関係や政治関係によって移住の自由が制限されていた時代には、出生地の守護神と居住地の守護神とが一致していたが、今日のように「お宮まいり」をした産土さまとは全く別の氏神さま・鎮守さまの氏子となるようなことも決して珍しくない。人を中心にして考えるならば、氏神と産土神とはどこへいっても変らないが、鎮守神は、その行くところにしたがって変るわけであった。

神棚（かみだな）

民家の神棚は茶の間や土間廻りに飾られ、座敷には飾らない。これは座敷がつくられるようになったのが比較的新しいものであることと、客に対する儀礼的な配慮からのようである。

神によって作られた自然、神によって修理固成された国家社会の中に神の霊を受けて生まれ、神の力によって育てられているお互が、神を仰ぎ祭るのは、やむにやまれぬ本能とも申せましょう。

神代の昔、すでに天照大神は伊弉諾尊・伊弉冉尊（いざなぎのみこと・いざなみのみこと）から賜わった御頸珠（みくびだま）を親神様の御かたみとなされ、御倉板挙之神（みくらだなのかみ）と称して棚の上にお祭りなされたことが、古事記に出ております。

日本の社会は家族制度で発達してきましたが、その根本である家庭生活は、昔から神祭りによって維持せられていたのであります。

日本の家庭は、世帯主を中心として結合した家族が、祖先の霊と一致して生活してゆくところであって、その、祖先の霊と共に生活し、共に結び合う現象が神棚祭り、すなわち家庭祭祀でありまず。そして、祖先崇拝・敬長孝養の美徳は、この家庭祭祀によって養われたのですから、その必要性は理解せられると思います。

宗像青年会議所 創立五周年記念講演 (一)

日本の心 ―その故郷の地にて―

黛 敏郎

ご紹介を頂いた黛です。

今日は宗像青年会議所の五周年を記念する、講演におまねきを受けまして、ここにこうして一時間半ばかり、私の話しを聞いて頂く機会を得ました事を、心から嬉しく思っております。

心から嬉しく思っていると云うのは決して、この社交辞令でも、何んでもないんでありまして、実は私は、この宗像と云う地にはほかの土地とは違った特別の、愛着と感慨をいだいている人間の一人なんであります。

と、申しますのは、今日はこの十一月の半ばで本当に菊の香薫る良き日と云う形容が、まさにピッタリ当てはまる日で、この周辺には全国から寄せられました菊の花が、この様に見事に飾られているこういう、すばらしい所で、話しをさせて戴くと云うのは、そうたびたびあると云うことではないんであります。が、

ことに、この宗像と云う処は私にとっても非常に御縁の深い処なんであります。

唯今も紹介のお言葉の中で、私は作曲家であるけれども、全国いろんな処を講演をして、活動をもしてまわっている。という御紹介がありました。

之、まさに、その通りでありまして、ここ十年来、私は色々なチャンスに、日本全国ほんとうに、北は北海道、南は沖縄に至るまで、音楽を聞いて戴くと云うことも、もちろんでありますけれども、そうではなくて、この私の話を聞いていただく、という目的の為に、ま、おそらく、数えて見た事はありませんけれども、三百ケ所や、四百ケ所は、まわっている勘定になります。

その時に私は、かならず、話の中で宗像のお話をするんです。で、なぜ宗像の話をするかと申しますと、ほかならぬ、この宗像大社のお話を、私はいつも、講演の中で、させて戴いています。で、何故かと申しますと、この宗像大社と云うのは、実は日本のお宮の中でも、非常に由緒の深い、と同時に又日本と云う国が生んだ、日本と云う文化を考える上にあたって、どうしても見逃すことの出来ない重要な意味を持っている、お宮なんであります。

で、ありますから、今日の講演の演題も、「日本の心」と云う題にしておりますけれども、だいたい私は、この日本の心と云う様な話をさせて戴いた訳ですが、その時かならず、この宗像大社のお話が出る。

私を、この宗像大社にめぐりあわせて下さったのは、実は、ほかならぬ出光興産でありまして、唯今も、御紹介があった「題名のない音楽会」という私がやっておりますテレビ番組は、今年で十六年目を迎えます。

このテレビ番組のスポンサーになって、この十六年間、ずーうっとお世話をして下さっているのが、この出光興産なんですが、ご承知の様に、この宗像大社の御造営にあたっては、この出光興産の出光佐三店主が、ひとかたならぬ、ま、お力をお下しになった。

それは、出光店主の非常にあつい信仰心のしからしむるところなんでありまして、、私も、ま、この出光さんの御縁で「題名のない音楽会」というテレビ番組を、ずうっと続けさせて戴いております関係上、この宗像大社というものの存在を実は、出光店主を通じて知らされたんであります。

で、実は今日のこの講演も、ほかならぬこの出光興産のお力添がありまして、宗像青年会議所の要請にもとずいて出光興産の福岡支店が、なみなみならぬ御尽力をなさって、現に今日も、松山福岡支店長がここにお見えになっていらっしゃいますが、ま、そういう様な私が十六年やっておりますこの「題名のない音楽会」と浅からぬ因縁にあります。出光興産、又この出光興産と浅からぬ因縁にある宗像大社、とこの三ツのものが混然一体となって、結びついて今日の講演の実現となったということが私の一つの喜びである。と同時に唯そういうことだけでなくて、さっきから申し上げている様に、この宗像大社というものが、日本文化の上で大変重要な役割を示しているお宮である、という事を宗像にお住まいになっていらっしゃるみな様には、ぜひこの機会にさらに、ま、今まで認識をお持でいらっしゃいましょうが、さらに認識を強めていただきたい、ま、こういうふうに最初に私の願いを申し上げたいんであります。

―◇―◇―

この講演は去る十一月十六日の宗像青年会議所五周年記念講演で講話されたものを、テープより集録したものです。

――以下は次号につづきます――

宗像大社歌会 俳句作品集（三五）

大井 木原 房子
刈り込まぬ土手の薮茶の花白き
久留米 入江 柳江
山ぞのわら家三軒柿たわわ
福間 広渡一寿軒
七五三撮る音属の多きこと
津屋崎 井浦 良介
栽かれる身となり冬野に佇たされる
田熊 安部 ゆき
いたわりの言葉あれこれ日向ぼこ
津屋崎 熊本 隼
菊展の媛宮静かな賑ひに
八幡西 磯谷 緑雨
菊一輪卓に彫おく夜寒かな
田熊 力丸 一郎
落葉踏む去りゆく秋を踏むごとく
宗像 吉田 衿子
百姓の量感わびし今年米
藤沢 玄洋子
散り紅葉山のせゝらぎ埋め尽す
名古屋 野崎 傳三
疎開せし山を恋しむ薬の飯
飯塚 花田 耕月
賀状書く線のゆがみは白内障
田島 有吉 唐水
何も彼も師走となって急がるる

第二三三回 宗像大社 歌会詠草

鐘崎 村田 四郎
汐引けば隠れし岩の現われて寄せ来る浪のおろかに散る
津丸 松尾 豊
息と孫で作り呉れたる棚満たし盆栽並べて新春迎えむ
宗像 中村 幸
お互に逢ふが別れと誰か言ひ二百の旅の終りちかづく

宗像郡考古学散歩 (7)

桜京古墳（玄海町牟田尻所在）

いしいただし

宗像大社五月祭から前方を眺めると、宮地嶽から続く丘陵が広がっている。師走の夕暮れは早く、赤紫色の雲が、玄界の寒風にとび、一面褐色の枯野の風景と重なって妙にわびしい。冬の弱々しい陽が玄界へ落ちていくと、あとは黒々とした丘陵の輪郭だけが残って、丘陵全体が一つの奥津城のように見え、手を合わせて祈らずにおれない雰囲気をかもし出す。

その丘陵のひときわ高いところに桜京古墳がある。桜京が装飾古墳として知られたのは、わずか五年ほど前の、昭和五十年のことであった。だが石室の開口はさらに古く、寛文十三年（一六七三）五月の落書きが、それを物語っている。恐らく開口は江戸初期にさかのぼるのではあるまいか。落書からさえ、既に三百数十年が経過しているが、緑や赤の文様が剥落せず残っていたのは、奇跡に近いことといえよう。

釣川下流の左岸、牟田尻の丘陵上には、羅漢、井下、スイラ、桜京等の大小八〇基ほどの古墳群があり、その古墳群のほぼ中央部、一番高い位置に、桜京古墳が築造されている。この古墳が並のものでないことは、墳型が前方後円墳からもうかがえよう。

古墳は全長四二メートル、前方部の幅約一一メートル。高さ約二・五メートル。後円部径約一八メートル。高さ五メートル。石室は複室の横穴式石室で、玄室の奥に石屋形がつくられ、恐らくここに棺を安置したものであろう。

装飾古墳とは、石室の壁や、石棺に、三角・円文・直弧文、人物や船・馬をえがき、赤・黄・青・緑・黒・白等で彩色や彫刻をほどこしたものをいう。時期は五～七世紀にわたり、九州、特に福岡県南部から熊本を中心として、全国に三百基ほどある。しかし全国に十数万基の古墳からすれば、数少ない貴重なものである。

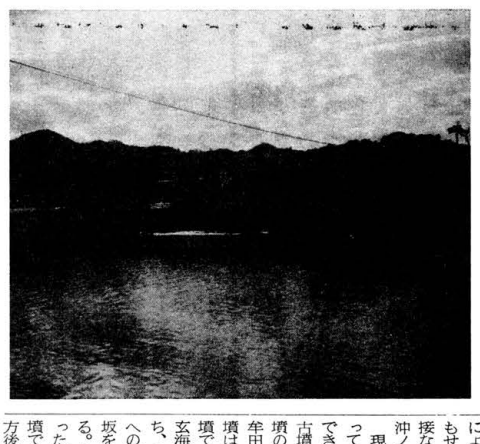
桜京の装飾は石屋形の奥壁から前面左右の支柱にほどこされている。それは「矩形を対角線で四分割し、その相対する部分を、赤・緑・黄色に塗りわけられていて、輪郭は手描きの線彫りでふちどられている」（宗像沖ノ島本文1）もので、平凡社カラー新書「装飾古墳」玉利勲著に石屋形奥壁部分のカラー写真が掲載されている。

桜京古墳の装飾古墳が発見される前までは、鞍手郡若宮の竹原古墳が、九州における北限とされていたが、桜京の発見は、宗像、しかも玄界灘に一番面したところに存在し、多くの学者に驚きをあたえた。開口もごく、無論、遺物は盗掘を受けて残っていないが、築造の時期は、六世紀中葉ほどといわれる。他の装飾古墳に類似を求めるならば、熊本県山鹿市のチブサン古墳が近いという。『日本書紀』によると、筑紫の水沼君は宗像三神である道主貴（みちぬしのむち）をまつっているが、胸形君は、有明地方の豪族とパイプをもっていたようである。桜京古墳のような装飾古墳があらわれるのは、有明地方の豪族との通婚関係によるものか（中略）、いずれにもせよ、九州内陸部の豪族との密接な関係がうかがわれる」（宗像沖ノ島本文1）

現在、古墳は埋め戻されてしまって、石室内の装飾は見ることができないが、私は二度ほど、この古墳付近を歩いたことがある。古墳の所在は正確にいえば、玄海町牟田尻字桜京一〇一九である。古墳は付近に二基あり、一号墳は円墳で、桜京は二号墳である。宗像玄海線の道路のわきに案内板が立ち、その横に小さな道が丘陵の方へのぼっている。池の横を通り、坂を登っていくと、丘陵上に出る。木々におおわれて、もりあがったようになっているのが桜京古墳である。じっと見ていると、前方後円墳の型がつかめる。後円部には一部石が露出し、少し凹んだところが石室の入口であったところである。昭和五十一年三月三十一日には国指定史跡となった。

余談になるが、数年前、私は津屋崎町大石の山中で、土砂採取中に古墳が見つかり、夜であったが現場にかけつけたことがある。ぼっかりと石室が口をあけ、懐中電灯をもって中に入ってみると、奥壁のところであったろうか、朱でえがかれた円文があった。「これは装飾古墳じゃないか」と感じたが、夜であって、いまひとつはっきりしない。その後聞くと、県の指導によって埋め戻されたという。

宗像には前方後円墳をはじめ、たくさんの円墳群もあり、今後、第二、第三の装飾古墳の可能性がある。



（写真説明）
五月祭（大社祭）より望む桜京古墳、手前に流れるは釣川なり

宝の蔵から
—古文書の話(4)—

小春日和がずいぶん長く続いたが、師走になってとうとう冬がやってきたようである。神宝館も開館当座の喧噪からすると、今はかなり静かになった。平日には、人の頭を気にせず心ゆくまで、沖ノ島の神宝の数々を見て歩くことができる。じっくり見たいと思っておいでの方には、平日に来館されることをお勧めする。

今回は「宗像神社文書」第二巻を御紹介申しあげよう。

第二巻は二十九通の重要文化財指定文書から成っている。鎌倉幕府からの下達文書が大半を占めている。

内容は、当時の宗像社が所有していた領地の支配に関するものが多い。「いっしょうけんめいに…」ということばがあるが、その語源は「一所懸命」、つまり、ひとつの所領（領地）に命を懸ける、ということである。

自分が領有する土地に乱入し作物などを奪い取る者が現われると、その領有者は我が領地を死守しようと、乱入者を然るべき訴訟機関に訴えるのである。こうして訴訟（相論）が始まり、それぞれの言い分をよく検討した後に判決（裁許）が下された。

判決を言い渡す文書が、関東下知状（かんとうげちじょう）、関東御教書（みきょうしょ）といった文書で、これらが第二巻にまとめられている。

ちなみに「関東」とは鎌倉幕府を指すことばであり、六波羅探題の下達文書は、六波羅下知状、六波羅御教書と称する。

蒙古襲来後、博多に設置された鎮西探題が出す文書は何というか。勿論、言わずもがな。鎮西下知状、鎮西御教書である。

◇一月祭典行事案内◇

◇辺津宮
一日　元旦祭　午前八時
二日　新年祭・産業文化振興祭　午前九時
三日　元始祭・家内安全祈願祭　午前九時
十日　恵比須祭　午前十時
十三日　献米奉告祭　午前十一時
十五日　成人祭　午前十時

◇中津宮
一日　歳旦祭　午前六時
海運講社大祭　午前十一時
二日　弁天講社大祭　午前十一時
酒造祈願大祭　午前十一時
成人祭　午前十一時
三日　元始祭・大漁祈願祭　午前十一時

◇沖津宮
一日　歳旦祭
三日　元始祭
十五日　月次祭

「古いお札について」

皆様の各御家庭の神棚には、多くのお札がお祭りされていることと存じます。これ等のお札は一定年度ごとに新しいお札を受けられてお祭り替えするのが恒例であります。

しかし古いお札を処分するのにお困りの御家庭が多いかと存じます。そこで当社では、広い駐車場と、本殿前に古札納所を設けておりますので、これまでのお札をここにお納め下さい。

又、交通安全のお守りも同様です。この古札は、新年の十三日、古札祭りを斎行の後当社境内にて焼却されます。

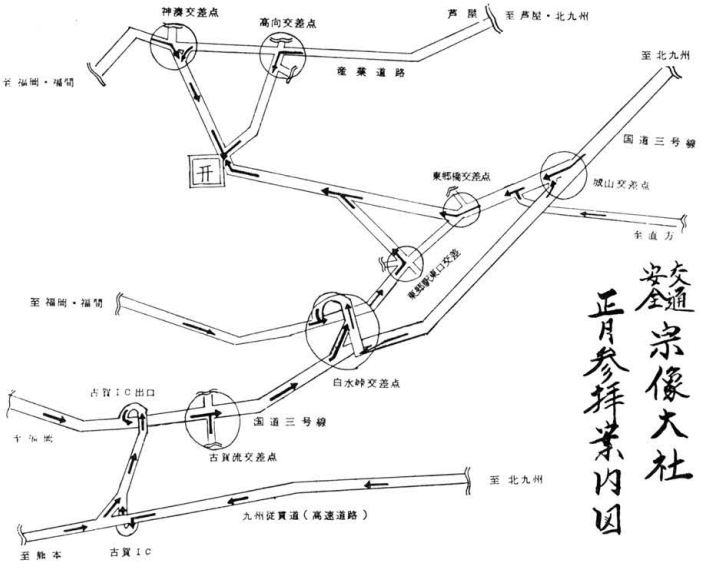
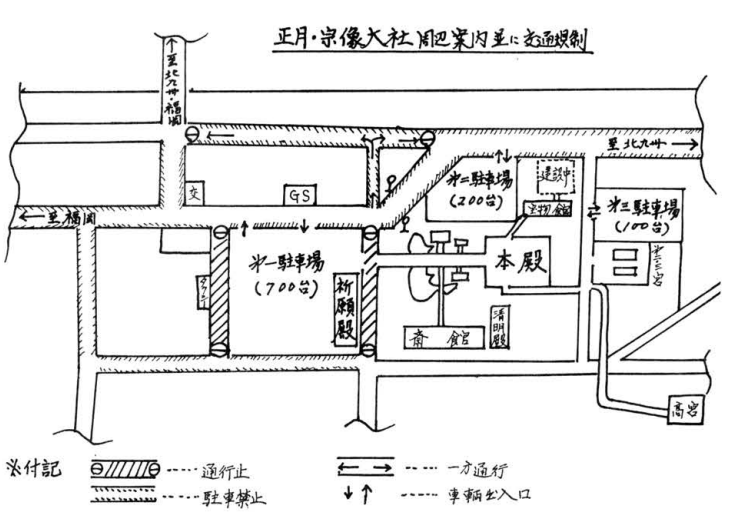
正月参拝御案内

宗像大社への正月参拝は、下記により参拝されますと便利です。

【九州従貫道御利用の方】
◇佐賀・長崎・熊本方面からは、古賀インターで降り三号線白水峠交差点より宗像大社へ
◇本州・山口方面からは黒崎インターで降り（若宮インターで降りた場合は途中の道路が狭く、又、判りにくい）国道三号線に出て城山峠交差点より宗像大社へ

【国鉄御利用の方へ】
◇国鉄御利用の方は上下線とも東郷駅で下車されますと、徒歩5分にて西鉄バス東郷駅東口停留所から、神湊経由福間方面行にて当社前下車（タクシーで約10分）

【バス御利用の方へ】
◇バス御利用の方は、急行・特急共宗像署前下車、神湊経由福間方面行にて当社前下車を御利用下さい。

※尚、詳細お問い合せの方は下記へご連絡下さい。

〒811-35　福岡県宗像郡玄海町田島　宗像大社社務所　TEL 09406 ② 1311 代